

Title	表紙 ; Contents
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2009
Jtitle	Newsletter Vol.10, (2009. 12)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000010--001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Newsletter

2009 December No. 10



Centre for Advanced Research on Logic and Sensibility

Contents

「つかの間の幸せを捕える」ことが
できただろうか

Have I succeeded in 'achieving
fleeting happiness' in life? 1

2009年度 Keio-Cambridge Joint
Seminar 報告

Keio-Cambridge Joint Seminar in
2009 2

2009年度 Keio-Cambridge Joint
Seminar に参加して

Report of the Keio-Cambridge Joint
Seminar

Gachon 大学セミナー報告
Keio-Gachon NRI Joint Seminar 3

グローバル COE 共催シンポジウム
「心に関する全日本ネットワークの構築」
Symposium by Global-COEs
“Organizing a Japanese Network on
Kokoro (mind)”

第2回人間知性研究センター
シンポジウム

The 2nd Symposium of Research
Centre for Human Cognition 4

マギル大学と海外提携

Our new International Collaborator:
McGill University

拠点リーダー中国科学院
(生物物理部門) を訪問

Visit to the Chinese Academy of
Sciences, Institute of Biophysics

夏季コース報告 国際交流
—「教わる」から「教える」へ—

International Exchange: From “Learn”
to “Teach” 5

プロジェクト科目の紹介

Project Course: Education and Research
Programs at CARLS

脳の講習会始まる

Seminar Series on Brain Science has
started 6

活動報告・研究員紹介 7

事務局だより 8

「つかの間の幸せを捕える」ことができただろうか Have I succeeded in 'achieving fleeting happiness' in life?

真壁利明 慶應義塾常任理事

Toshiaki Makabe Vice-President, Keio University. Professor



米国に私の年齢と開催回数を同じくする学会がある。今年は
ニューヨーク州の田舎 Saratoga Springs で紅葉の時期に開催され
た。招待講演を終えホテルの部屋へ戻ったところに「論理と感性
の先端的教育研究」GCOE 拠点から原稿依頼のメールが届いた。
一研究者の心境を会場から綴らせて頂くことにする。

私の所属する応用物理の一部門では、マイクロ波通信、気体レー
ザ、半導体微細加工、環境バイオと、およそ互いに関連の薄い
研究対象がほぼ20年間隔で出現している。これらの対象は「低
温プラズマ」が一つの鍵となる科学技術で、研究費の初期投資→
研究者の増加→競争的研究費の増加→若手研究者の育成へとつ

ながり、科学技術の爆発的な発展に結びついてきた。地味な基礎研究を続けてきた一握りの
研究者の下に、多様なスキルを持った研究者が集い、研究のバックボーンが描かれロードマッ
プが定まりブームが起こるのである。人種を超え、国境を超え、分野を超え、世代を超えて
集まった研究者は、自らが育った環境の影響を陰に陽に生かしながらスキルを磨き第一人者
へと成長してゆく。その研究対象は20年～30年後に、一見すっかり掃除の行き届いた知識
状況をつくりだし、その科学技術が常識化され文化の発展に貢献してゆく。この一連のプロ
セスを、すでにルネッサンス期の巨匠ダントは「考えているだけでは不十分だ。これを言葉で、
文章で、実験で実証して、初めて知識・学問 (Science) となる」と表現している。

研究は無味乾燥としたものと想像されがちだが、実際の研究者が生きているのはダイナミック
で人間くさい世界だ。プラズマによる物質の微細加工の研究グループが活動を始めたころ、
学術用語の定義とその意味の微妙な相違から生まれる誤解など、誕生まもない融合分野なら
では戸惑いや、その奥の深さを認識する喜びを日々味わっていた。互いに夢するところを
求め、プロジェクト研究に精を出し、いつまでもこの状況が続くものと考え、苦しくも充実
感のあったあのころを懐かしく、今この会場で思い出すのである。10年、20年と時はたち学
術融合が進み、新たな分野「プラズマエレクトロニクス」が確立した。ややもすると事実ば
かりが堆積し、そのバックボーンや理念が埋もれてゆき、情報の洪水に飲み込まれそうにな
るなか、いつの間にか多くの先輩諸氏が大学や研究所を去ってゆく時期となっていた。人生
における「つかの間の幸せを捕える」ことができただろうか。同年輩のシニアメンバーがめっ
きり減ってしまったこの学会で自問自答している自分に気づくのである。一時期、私のグル
ープにEUから参加していたポスドク(当時)に久しぶりに会場で出会った。短い会話を通し
て順調に研究者の道を歩み続け、新分野開拓の一翼を担っている様子を知り、教育者として
安堵し研究者として心の和む一時を過ごすことができた。

さて、国境を意識しないグローバル化が進むなかe-Science時代を迎え、大学における若
手研究者の育成と研究者のスキルがこれまで以上に重要となっている。残された科学の秘境
の一つ「論理と感性」に関する教育研究が、慶應義塾を中心に融合環境のもとで精力的に進み、
豊富な成果が生まれている。国際連携も充実し教育研究拠点としてのプラットフォームがそ
の求心力を増すなかで、今後の幅広い波及効果に期待してやまない。

(See next page for English summary)